百々裏話（12）

おもてあきら

田村は、能本作者注文・自家伝抄・二百十番謡目録など、謡曲作者研究上の諸資料が一致して世阿弥作としているので、一応それが通説になっている。しかし最近の謡曲作者想定の態度は、戦前に較べて著しく厳しくなっており、室町後期以後の資料が一致しているだけでは簡単に世阿弥作と認めず、世阿弥の著書や作品自体の中に傍証を要求するようになつている。世阿弥が百番以上の謡曲を作ったと言うような説は、今日ではほとんど信じられていないのである。

ただ田村の場合は、世阿弥から金春禅竹に相伝した卅五番の能本の目録にその曲名が見えており、世阿弥以前から存在した曲であることは間違いない。また、申楽談義の最終の部分の、田楽の亀阿弥の欠点をのべた条に、

清水寺の曲舞に小歌節あり。「嵐に類う松が枝は、をのれと琴を調べて」、「嵐にたぐう」までは、せめてかくの声なれば、曲舞節なり。「松が枝」からは女ぶし也。「行叡は東をさして」、ここも女ぶし也。（原文はほとんど片仮名である）

という文句がある。この清水寺（セイスイジ）の曲舞は、世阿弥の先輩の亀阿弥が謡っていたのであるから、かなり古い曲舞である。ここに引かれている「行叡は東をさして」という女ぶし（小歌節の異名と推定されている）の文句は、田村の語りの中の一句と同じであるから、田村は清水寺の曲舞と深い関連をもって成立した曲らしい。清水寺曲舞の内容は右の引用文以外に伝わっていないので、相互の関係もよくわからないが、古作清水寺曲舞を基にして世阿弥が田村を編曲したとする見解も、相当可能性があるように思われる。世阿弥作とすれば、他の世阿弥作の修羅物とくらべて、田村だけがいろいろの面で相違していることは注意しなければなるまい。

なお、吉田本「世阿弥十六部集」の申楽談儀の「心根を知ることは」の項に

「天も花にあゝりや」、「り」ときりて「や」とうたふべし。

とあり、この文句は田村のクセの文句と一致する。しかしこの部分の正しい本文は「天花にあゝりや」で「も」が無い。「も」の入つていた本文が誤写されたのであろう。

二月抄

亀山節子

二月のイメージ―雪、梅、はるまつ心……。「きさらぎ」とは寒さ厳しく、衣を重ねる意。「二月」というと柔いトーンとして響くが「如月」となると鋭いきりつとした冴えを与えるのもこの月にはピッタリである。

能の季節は、三月、九月が多いが二月―早春を季節とするものには、求塚・胡蝶・当麻・消え失せ、ただ春の夜の月だけが曙の花を照らしている。それは在りし御幸の折と同じように。

前場の現実的な庶民の遊興気分と、後場の高雅な平安時代の情緒をたくみに絡み合せて花見の場面に展開し、春のほのぼのとした特殊な雰囲気を描き出しているこの作者の手腕は凡庸なものではありません。この曲の作者に就ては、自家伝抄が世阿弥としている他は総て金春禅竹としています。禅竹は〝幽玄〟に世阿弥の〝優しく柔和で美しい〟という内容の他に〝面白く花やかな浮き浮きとした情趣〟を含めていますが、その主張は、この曲に於て充分達せられていると考えられ、また題材処理の仕方と特に作曲上から、まず禅竹作とみて差支えないと思われます。兎に角、限りなく楽しい曲の一つです。

るのは吉田本の底本となった小杉本だけで、筆者が田村の文句に引きずられて「も」を入れてしまったのであろう。「天花にゐるりや」は蘭曲の鼓滝の文句である由、数年前申楽談儀の研究会があった時に寿夫さんから教えられた。その後、福王盛翁の本から写した黒川春村本申楽談儀を調べてみたら、右の文句に福王が「鼓滝」と朱記してあったことがわかった。謡の文句は何と言っても玄人が一番よく知っているようである。

田村の古写謡本を調べてみたが、セリフの部分以外には大きな相違はない。しかし上懸りと下懸りとでは、主として前段がかなり違っている。観世で「ある時木津川の川上より」と語るのが下懸りでは「淀川の水上より」となっているのもその一つで、ここは古来詮索されている相違である。木津川も最後は淀川に合流するから、同じことのようでもあるが、木津川の川上と言えば伊賀の山奥になってしまい、清水寺とは縁が遠くなる。「謡曲拾葉抄」によると、清水寺は昔大和の木津川の川上に在って、桓武天皇平安遷都の後に京都へ移したのであるという清水寺縁起も存在したらしい。この縁起が古いもので、田村の作者がそれに拠ったと考えれば、観世の文句が原形であるとの見方も成立する。しかし、中世の清水寺伝説の多くは淀川としているから、下懸りの方が原形と考えるべきであろう。

小塩　この曲の詞章には、二十首に近い古歌が織込まれており、これほど和歌に依存している曲は他にも類が少なかろう。しかも

○年ふれば齢は老いぬしかはあれど花をし見ればもの思ひもなし（藤原良房）

○都辺はなべて錦となりにけり桜を折らぬ人しなければ（藤原定家）

などの歌を、ほとんど原歌そのままに引用しているのが目に立つ。後段などは古歌を羅列しているだけで、何を言わんとしているのかちっともわからない。いかにも歌道を偏重した禅竹の作りそうな曲である。

一体、和歌をふんだんに盛込んだ謡曲には、謡としては面白いのかも知れないが、主題のはっきりしない、印象散漫な曲が多いようである。桜川・雲林院・竜田などもそうである。このことは、勿論個々の作者の手腕にもよることであろうが、和歌と謡曲との関係を考察する際に注意を要することではないかと思われる。

（33・2・5）

海土などがある。

能の空間美は確かに夏のものでなく、冬の冴えた冷たさのそれのようである。

深山には松の雪だに消えなくに都は野辺の若菜摘む……

求塚の乙女の爪先きは春をまさぐる。

昔から残る二月の行事から「はる」を呼ぼう。まず「節分」―柊の小枝にめざしの頭をさし魔除けとして門々に立てたお呪いも今は見られぬ。白い雪上に目を射る柊のみどりの葉！　豆まきの後の福茶の香り高いこと。

同じ夜、奈良の「春日神社の万燈籠」として名高いものがある。千余の釣燈籠と石燈籠に全部火を入れるのである。荘厳・神秘の世界が赤々と開かれ、古代への郷愁にかられるのである。それから十日程立つと「三笠の山やき」だ。昔、東大寺と興福寺とが境界争いをしたので他の五大寺が仲裁に入り若草を焼いて和解の証としたのが始まりとか。古都の数多の大伽藍のシルエットを夜空にくっきりと浮彫りさせ、目も彩な華麗な火の祭典。古代人の閑雅なおおらかさ。早春の詩はスケールが大きい。

今月の錬仙会は一足さきがけて、田村、小塩は、童子、尉と老若二人の花競べである。

平安の昔の花見のさんざめきが、二〇・五世紀の今日の見所に華やかに伝わってくる。